

表紙解説 淡窓南遊を追憶す「宿中谷」の碑

宿中谷 廣瀬淡窓

この詩は、白杵市

野津中の谷トンネル

出口に平成二十二

年七月に淡窓伝光靈

流野津詩道会により

建てられた碑です。

中谷寥寥人行
陰雲堆裏宿柴荆
乳狼夜半来尋食
一径菅茅踏有聲

説明には「廣瀬淡窓

は江戸後期の儒学

者、漢詩人、豊後日田の人、私塾「咸宜園」の開設者。十

四歳の時佐伯藩の松下西洋に師事するため寛政七年（一

七九五）四月一日初の遊学に出発する。途中岡藩竹田城下

に三日間滞在、四月七日に竹田を発ち、この地中の谷峠で

日が暮れ一軒の人家に宿す。

その時の旅愁・家恋しさを詠んだ詩」とあり、淡窓伝光靈

流宗家深田光靈氏の書き下し文が記されています。

深田光靈氏は豊後大野市緒方町の出身で本名光、淡窓

流詩吟（廣瀬淡窓初代家元）を清浦奎吾氏に学び、廣瀬正

雄氏の要請で二代目を継承。昭和五十四年淡窓伝光靈流

として特許を得る。

吟詠にもとづく、この詩の書き下し文には、

中の谷は 寥寥として 人行かず

陰雲 堆裏 柴荆に 宿す

乳狼 夜半来たりて 食を 尋ね

一径の 菅茅 踏んで声あり

と書かれている。

また、佐伯史談会会報二百十号、九ページに「懐旧楼

筆記」巻五・四方貞俊より」と題し、木許博氏、佐藤巧氏

の力作が載せられている。

廣瀬淡窓氏が十四歳の時、松下西洋（筑陰）を頼って佐

伯の四教堂に來た事を、後日漢詩に読み書き残された懐

旧の詩である。「懐旧楼筆記」として残されている。

この「懐旧楼日記・懐旧の詩」第五」に同じ漢詩が載って

いる。あわせて読んでみると面白い。

※松下筑陰……

久留米藩藩医の養子 名は勇馬のち震左衛門と改

めのち佐衛門と称す。号は西洋、筑陰。

故あって日田に住み日田代官所で文学を講じる。

幼少の淡窓に漢詩を教える。のち四教堂教授。